



学校だより

9月号

# ふじのき

横浜市立藤の木小学校

校長 今野裕子

令和5年8月31日

〒232-0061 横浜市南区大岡四丁目10番1号 電話045-731-0606 FAX045-713-7916

学校教育目標

藤の学び合い 響き合い  
一人一人を大切にしながら学び合う学校をめざします

## アツい夏

校長 今野 裕子

今年の夏はことさらに暑く、日本各地で過去最高気温を観測しました。涼しいはずの北海道でも高温が記録され、外に出ること自体が危険に感じる暑さの中、全国で水の事故や熱中症で搬送される人が相次ぎました。日本だけでなく、世界各国でも熱波や山火事による甚大な被害が多発しています。国連のグテーレス事務総長は、7月の世界平均気温が観測史上最高になる見通しとなったことを受け、「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰の時代が到来した」と警告しました。一般に、～“化”とは、ゆるやかにその状態が変わっていくことですが、体温を上回る気温を実際に体感している中でその言葉を聞くと、“ゆるやか”を通り越し、ボコボコと首を立てて水が沸騰してゆくが如く、地球の気温が一気に高温になっていく様を連想してしまいます。二十四節気の処暑を過ぎてもなお、厳しい暑さが続いており、この暑さは一体いつまで続くのか、秋や冬はやって来るのか、次の夏はどこまで暑くなるのか等と、心配が尽きません。大変な時代になりました。

この夏、ストランディング（クジラなどが海岸に打ちあがること）など、海の哺乳類の調査研究にあたっている、国立科学博物館研究主幹の田島木綿子先生のお話を聞く機会がありました。田島先生は、打ち上げられたクジラなどを解剖する過程で目のあたりにする胃中のプラごみの現状に「ここまでひどいか」と驚いたそうです。便利なプラ製品が海に行きつく理由の一つは、近年の気候変動で増えていると言われるゲリラ豪雨。生活の周りのものはあつという間に海に流されていってしまうそうです。

プラ製品は便利で現代の生活には欠かせないものとなっています。しかし、今、国立科学博物館で開催されている特別展『海～生命のみなもと～』では、近現代の文明の発達とともに循環できない物質が自然界に排出され、残存している現状も展示されており、例えば、相模湾水深約1,000mから古タイヤが、沖縄トラフ水深約2,000mから約50年前の清涼飲料水の空き缶が回収され、その実物を見ることができます。北海道えりも岬沖で回収された食肉包装容器は、水深約7,000mから回収されたそうですが、約50年前の製造年であることやジギスカン焼肉という商品内容まではっきりと読み取れる状態でした。自然界に排出されたプラごみが、その水深にまで到達し、50年間も分解されずに残っているという事実には驚愕します。

田島先生は、「最善策は“作らない 使わない 捨てない”だが、現代の生活で“使わない”選択は困難なので、“なるべく使わない”ようにしながら“適切に処理する”必要があることを、研究を進めながら伝えていきたい」と仰っていました。また、国連のグテーレス事務総長は、前述の発言と同時に「気候変動の最悪の事態を回避することは、まだ可能だ」とも述べています。まだできることの余地がある今、地球沸騰を止め、環境を守っていくために行動していくことが、最優先課題の一つなのかもしれません。社会に目を向け、課題解決のために必要なことを考え、仲間と協力して実践し、社会に貢献しようとする熱い心をもった藤の木小学校の児童を育てていきたいと、強く思った暑い夏でした。